

## 第2章 ノーマリセーリングの波

まず、知的ハンディの世界で……スウェーデンで

### ●グループホームは大家族の温かさ

「ハンディをもった人々にも可能な限り『ふつう』の生活状態を」という、デンマーク生まれのノーマリセーリングの思想は、お隣のスウェーデンにまず強い影響を与えました。

スウェーデンは、一九六八年に法改正をして、「知的ハンディキャップをもつ人を支援する法律」（略称「支援法」）を制定し、その第五条にノーマリセーリングの原理を掲げました。

市町村は、四、五人単位の「グループホーム」を「ふつうの生活」の拠点として、つぎつぎとつくっていきました。一九六五年には六人分だったのが、八六年には六五〇〇人分に。日本の人口に換算すると九万人分にもなります。

八八年秋、私は、ストックホルムのヴィンテルテュール団地の原昭治・清香夫妻のお宅に居候をさせていただいていました。市の中心街から車で約十分ほどのところにある、ごくふつうの団地です。この中にも、三つのグループホームがさりげなく組み込まれていました。

その一軒を訪ねてみました。原夫妻が近所づきあいしているというので、あとについて行っただけです。そこには、男女五人が、市の職員の助けを受けながら共同生活をしていました。

三五歳の男性は、私がいた二時間の間、不思議な声をあげながら、左右に長身を揺すり続けていました。二七歳の男性は、ダウン症の人独特の人なつっこさで、私にまつわりついていました。彼は突然、「ヘビが好き」などと突拍子もないことを言いだします。いずれも、かなり深刻な知的ハンディキャップをもった人たちでした。

八年前、大型施設から、ここを選んで移ってきたのだそうです。

五人は、十畳ほどの個室を持っていました。緑の色調で統一した部屋、スターの写真が



並んだミラー調の部屋、小型ピアノとステレオのある音楽ムードいっぱい  
の部屋…どの部屋も個性的でした。カーテンや家具は、職員と町へ出て、本人が  
選んで買ったものなのだそうです。

この他に、共用の広いリビングルーム、食堂、台所、風呂、職員の部屋…合  
わせて二九九平方m、一八〇畳分。

ハンディをもった人の住まいとしては、体が不自由な人のための「サービス  
ヒュース」があります。ヘルパーがすぐ駆けつけてくる体制も整っていますが、  
プライバシーが何よりも大切にされています。部屋のつくりを工夫することに  
よって、手足が不自由でも目が見えなくても、暮らせるように配慮されていま  
す。

「グループホーム」は、重い知的なハンディをもった人のために考えられたも  
ので、プライバシーより、家庭的な暖かさが優先されているように見えました。  
気分は、昔の大家族の家に似ています。

「ここは施設ではなく家庭。献立も余暇の過ごし方も、自分で好きなように  
決められます。ふと思いたって二、三人で映画に行くこともあるし、部屋でひ  
とりで過ごすことも自由です」

交代で住み込む「家族役」の市職員は、そう話しました。  
「支援法」の趣旨をさらに徹底した「新支援法」は、八六年七月一日に施行さ  
れました。

知的ハンディをもつ子どもの、施設への新入所は禁止されました。おとなも  
特別な理由がある場合を除き、施設の代わりにグループホームが提供されるこ  
とになりました。

\*

ウィークデイは、ふつうの人と同じように、朝、家を出ます。通勤先は、ふ  
つうの職場や、ハンディキャップを配慮した支援付き職場や、ダークセンター  
です。「ダーク」とはスウェーデン語で「昼間」、つまり「デイセンター」です。  
重い障害をもった人々が昼間集まって、仕事や食事をともにする社会への中継  
駅のようなものです。市町村立ですが、どういうわけか、お役所的な雰囲気は  
感じられません。

人口一六〇万のストックホルム県だけで三二カ所。いずれも駅に近い便利な  
ところにあります。そのひとつ、ハールンダ・ダークセンターを訪ねました。  
日本人の石井麻子さんが働いていると聞いたからでした。

●何をするかは本人が決める



朝八時、職員が集まってきました。八時半、メンバーと呼ばれる人々が地下鉄やバス、あるいは車いす用のリフトバスで「出勤」してきます。六〇人のメンバーと二〇人の職員が十のグループに分かれます。革工芸、織物、木工、布地プリント、廃品リサイクル、裁縫、農作業、団地の清掃、野外活動、包装。コーヒーを飲みながら一日の手順を話しあいます。このうちセンターの中に残るのは四グループだけ。七グループは住宅街のアパートや駅前の店や十五キロ離れた農場へ。

「職員の役割は世話をやくことではないのです。一人一人のメンバーについて、何ができるかを考え、可能性を見つけ、広げていく。仲間と一緒に活動していく中で、計画する能力、仕事をこなす能力、評価する能力、社会性が発達していくように支援する。これが私たちの職員の役割です」

そう、ジョイ・ベニグ所長は言います。

このセンターができたのは七四年で、当時は学校の延長のようでした。メンバーの能力に合わせて訓練する。二〇人の機織りグループと三〇人の作業療法グループに分かれ、職員は先生、メンバーは生徒、といった上下関係の雰囲気だったそうです。

七八年に改革が始まりました。ジョイさんが職員の熱心な招きで所長に就任しました。彼はインドネシア生まれのオランダ育ちです。白人の血が四分の一混じっているとはいえ、顔だちは明らかに東洋人です。日本の福祉施設の職員だったら、インドネシア人の所長をわざわざ招くだろうか？そう考えてみると、この国の人々の平等感が本物だと実感できます。

ジョイさんは、職員の期待通りのリーダーシップを発揮しました。

七八年には縫製グループが団地の一室を借りて仕事場を持ち、三年後には店も開きました。八三年には革工芸を手がけているグループが、隣駅の商店街にアトリエを兼ねた店を持ちました。ここでは、夜、市民向け講座も開かれてい



ます。八七年には掃除グループが団地から仕事を請け負いました。

「何もしたくない」というグループもあります。その中から、戸外を歩き回るのが好きな人々のグループもできました。

「何をするかは本人が決める。これが大切」とジョイさんは言います。

● 社会への架け橋 「ガラスの入り口」

ある日、この裁縫グループが、ニーボード・ダーグセンターの織物グループと交流するというので、私もついて行きました。このダーグセンターには、名物レストランがあります。隣のオフィスとの間をつなぐがガラス張りの渡り廊下につくられたもので、その名も「グラサデ・ゴンゲン(ガラスの入り口)」。

この名前には、社会へ向かう明るい架け橋に、という願いが込められています。知的ハンディをもったメンバー十八人と職員五人が、肉料理、サラダ、パン、給仕の四グループに分かれて、日替わりメニュー六〇食を作ります。テーブルクロスと洗濯とアイロンかけは洗濯グループの受け持ち。カーテンは染色グループの作品です。メンバーの作品である版画やししゅうも展示されています。

人參の皮をむいている女性は、以前は、頭に壁を打ちつける危険な癖がありました。ところが、この仕事を始めてから、それがピタリとやんでしまいました。自分が選んだ仕事です。しかも成果が実感できるのです。それが自傷行為を忘れさせてしまったようなのです。

「ふつうの生活」は、住宅地にあるふつうの大きさの家に住むことだけを意味しているわけではありませんでした。ふつうの人のように、通勤、通学し、社会と交流し、余暇を楽しみ、異性と交際を





します。自己決定が尊重されます。たとえば、知的なハンディをもった人々のロックグループがいくつもあって、年一回、ストックホルムで一番大きなホールを借りきって盛大なコンサートが開かれます。その中心人物は、日本からやってきた大滝昌之さんでした。このグループホームにも毎週教えにきます。

ストックホルムでは、水曜日には市営プールの水温が三二度まで上げられて、ハンディキャップをもった人が優先になります。そこは、保育所の子どもたちや定年退職した人々との自然な交流の場になります。

\*

日本の風景が、ふっと私の目に浮かびました。

仕事を選ぶこともできず、わずかな賃料で、下請け仕事をつつむいて黙々としている「障害者」と呼ばれる人々。薄給に耐える小規模共同作業所の職員。資金集めに走り回る老いた両親。

「東京は土地が高い」「反対運動もある」という理由で、遠く離れた秋田県や山形県の委託施設に送られていく、東京生まれ、東京育ちの知的なハンディをもった人々。

日本のこの人々は、「どこに住みたいですか?」「何をしたいですか?」と、本気でたずねてもらった経験が一度もないのです。



『寝たきり老人』のいる国 いない国』  
(ぶんこ社)

1990年発行より。